

平成18年度採択現代GPプログラム 「医療系学生の保育所実習による子育て支援 乳幼児との継続交流を取り入れた体験型コミュニケーション教育① ～3年間の実践報告～

長宗雅美¹ 寺嶋吉保¹ 高井恵美¹ 山田進一² 安井夏生¹ 多田敏子³ 佐野勝徳⁴ 高塚人志⁵

¹ 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス(HBS)研究部医療教育開発センター ² 徳島健生病院小児科 ³ 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス(HBS)研究部看護学講座 ⁴ 全学共通教育センター長 ⁵ 鳥取大学医学部総合医学教育センター学部教育支援室

1. はじめに

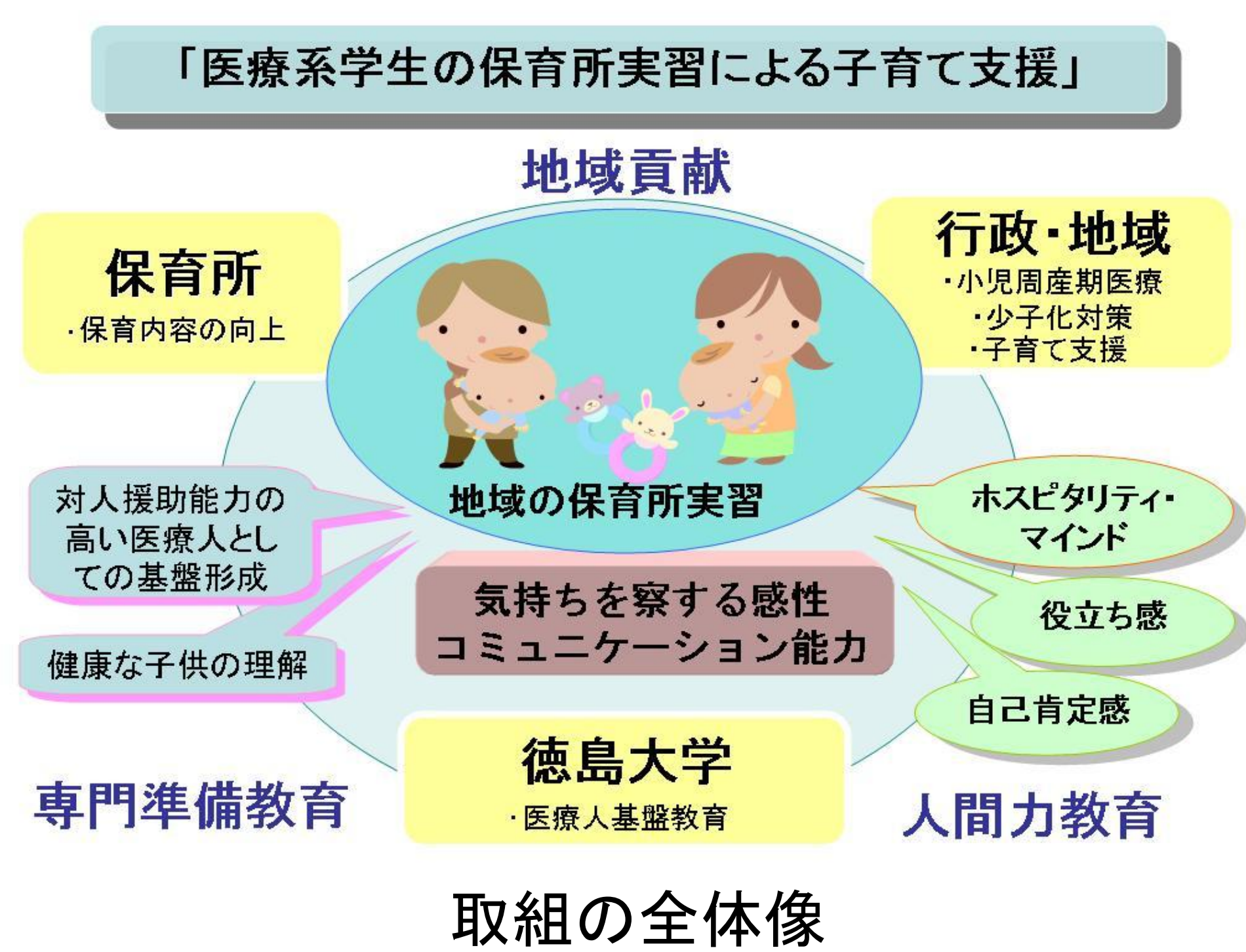
現代の大学教育では、従来からの専門力育成と共に、人間力をバランスよく育むことが求められている。「人」への援助を目的とする医療系学部ではその期待は特に強い。

文部科学省 平成18年度大学改革推進事業「現代的教育ニーズ取組支援プログラム(地域貢献)」に採択され、平成20年までの3年間の補助金を得て行なわれているこのプログラムは、医療系学生の人間性教育を目指した「体験型コミュニケーション教育」である。

乳幼児との継続交流を通し、相手の気持ちを察する感性を磨き、自己肯定感や役立ち感を体験してゆく過程で、人間力を培おうとするものである。

また、学生の学びと同時に、地域の子育て支援に貢献するものであることも目指す。

これまでの授業で行なってきたアンケートをもとに、3年間の実践を報告する。



2. 実施状況

<平成18年度>

「医学入門」選択コースの枠組みで
試験的実施
医学科1年生希望者20名受講

<平成19年度>

全学共通教育科目として開講
医学科1年生95名
保健学科看護学専攻1年生70名 受講

<平成20年度>

全学共通教育科目として開講(受講枠拡大)
医学科1年生95名
保健学科看護学専攻1年生67名
歯学部1年生1名
薬学部1年生2名
★計350名が受講



3. 取組の概要

取組の目的

- ホスピタリティ・マインドを実体験として学び、自らの人間関係を見直す機会とし、真に患者と向き合える医療者を育てる一助とする。
- 学生の交流を通して、地域の子育てを支援する。

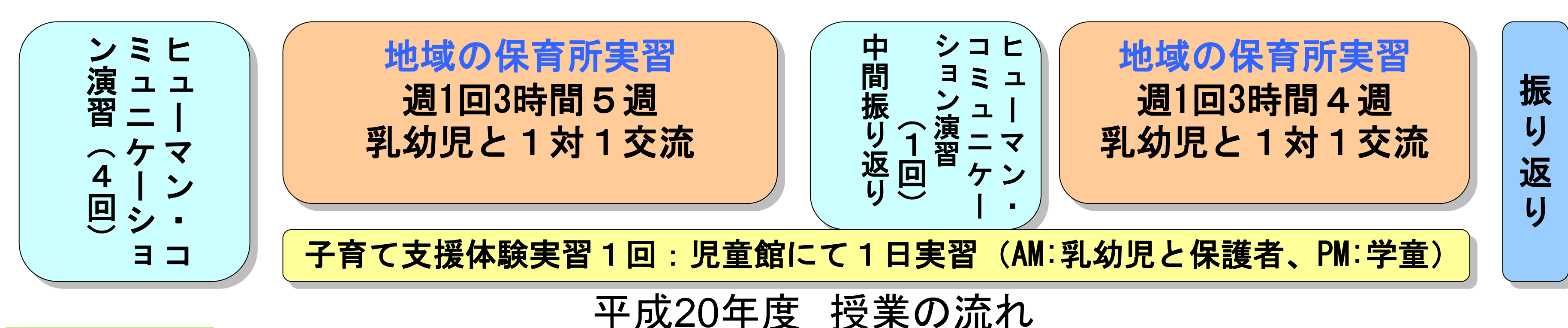
期待される効果

学生への直接的な効果: 基本的なマナーの習得
ホスピタリティ・マインドへの気づき
「役立ち感」「自己肯定感」の実体験
仲間への自己開示、信頼関係の構築

地域への効果: マンパワーの充実による保育の向上
保育者の気づき(内省)

長期的な視点で考えた効果: 子どもの存在に対する肯定的理解
小児周産期医療への関心

授業の組み立て



4. 方法

授業後に行なったアンケートより、この授業を通して学生が自己の変化をどのように自覚しているのか、そして授業に対してどのような意識を持っているのかを探った。

4. 結果と考察

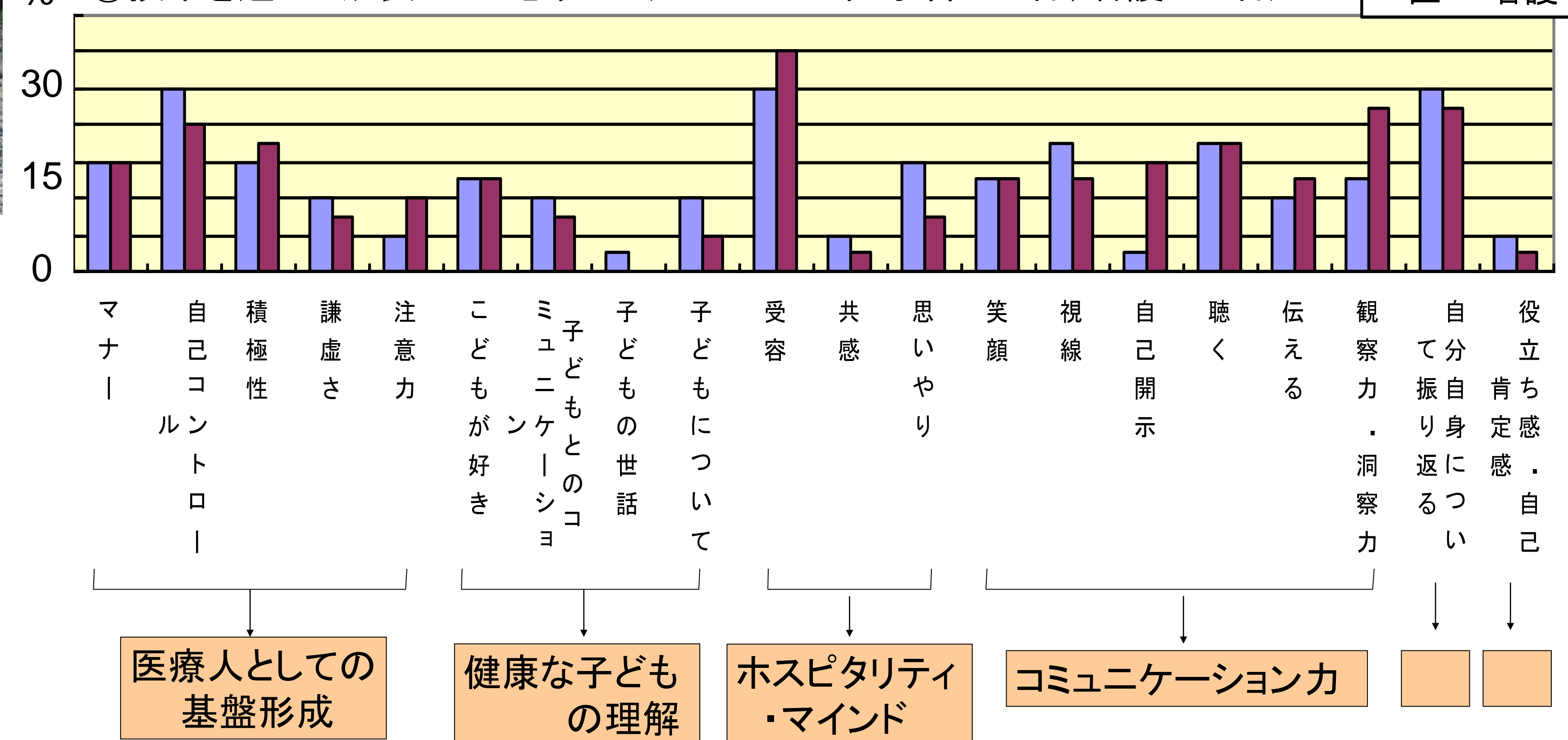
①授業終了後の自己評価(H19:165名、H20:112名)

	H19	H20
Q1. 他人と関わるのが苦手でなくなった	はい76%	はい78%
Q2. 挨拶や自己紹介が苦手でなくなった	はい60%	はい67%
Q3. 相手と視線を合わせ対応できるようになった	はい87%	はい83%
Q4. 表情や行動から相手の気持ちを汲み取れるようになった	はい74%	はい83%
Q5. 相手の気持ちや考えを受け止め、行動できるようになった	はい80%	はい87%
Q6. 自分や相手の長所を受け止められるようになった	はい85%	はい85%
Q7. 乳幼児とふれあうことが好きになった	はい88%	はい87%
Q8. コミュニケーション力が高まった	はい90%	はい96%
Q9. 今後も少しでもコミュニケーション力を高めたい	はい99%	はい98%

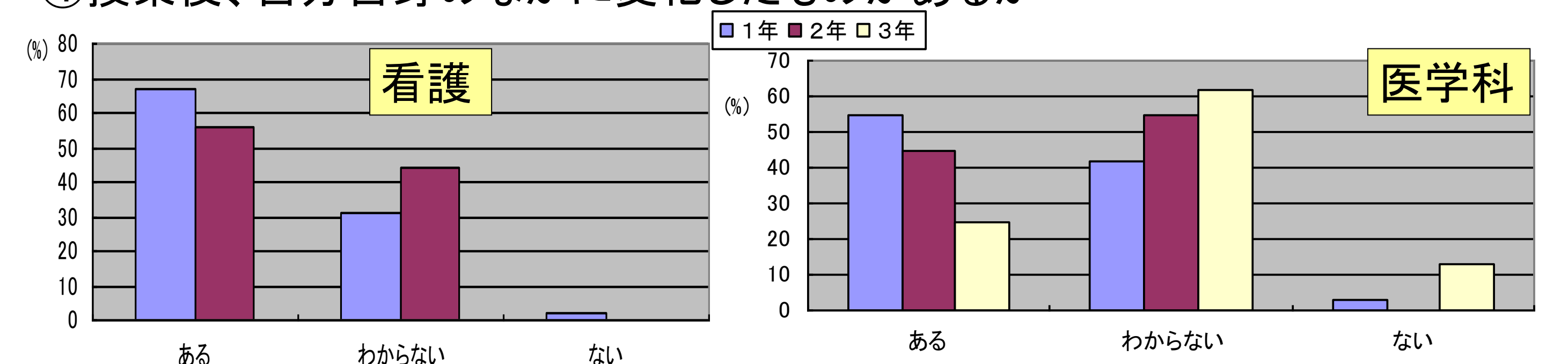
②授業に対する評価(H19:165名、H20:112名)

	H19		H20	
	そう思う	ややそう思う	そう思う	ややそう思う
Q1. この授業を選択してよかった	90%	9%(合計99%)	90%	7%(合計97%)
Q2. 実習は満足できた	82%	14%(合計96%)	78%	20%(合計98%)
Q3. 実習での学びは大きかった	90%	9%(合計99%)	87%	12%(合計99%)
Q4. この授業は改めて基本的マナーを身につけることの 一助になっている	79%	19%(合計98%)	82%	15%(合計97%)
Q5. この授業はホスピタリティ・マインドへの気づきの 一助になっている	86%	12%(合計98%)	83%	16%(合計99%)
Q6. この授業は役立ち感を実感し自己肯定感の芽を育む ことの一助になっている	57%	32%(合計89%)	50%	41%(合計91%)
Q7. この授業はコミュニケーション力を高めることの 一助になっている	80%	17%(合計97%)	80%	19%(合計99%)
Q8. この授業は心の癒しや元気、やる気を育む一助に なっている	77%	17%(合計94%)	74%	21%(合計95%)
Q9. この授業は自分を振り返る機会になっている	78%	20%(合計98%)	77%	19%(合計96%)
Q10. この授業を通して自分自身の生き方や普段の人間 関係に変化があった	65%	27%(合計92%)	61%	34%(合計95%)
Q11. この授業は仲間のよいところが見える	80%	15%(合計95%)	73%	20%(合計93%)
Q12. この授業は仲間作りに役立っている	67%	26%(合計93%)	73%	23%(合計96%)

③授業を通して成長したと思うこと(H19&H20 医学科140名、看護137名)



④授業後、自分自身のなかに変化したものがあるか



①自己評価ではH19,H20とも全ての項目で学生が自己の成長を実感していると思われた。「Q2.挨拶・・・」ではやや数値が低いが、実習の様々な場面で挨拶の必要性に触れ、その意識が高くなったことが予想された。

②授業に対する評価についても同様にH19,H20ともすべての項目でその評価が高かった。学生が前向きに積極的に授業に臨んでいたことが予想された。

③学生自身が成長したと考えている項目は、自由記載であるが私達が期待した項目が上がってきている。

④この授業で自分の中に何か変化したものがあるかという問いについては「ない」と答えた学生は少なく、「ある」と「わからない」が半々みられる。

短期的な効果はみられたが、それが学生自身にもたらしたものを探るには長期的検討が必要と思われた。

5. まとめ

通常の講義では得がたい態度変容が見られたこの取組は、人間力教育・専門準備教育として有効であると思われる。この態度変容を継続・発展させるための検討が必要であろう。

★この授業は「みなさんが選ぶ優れた授業」で
徳島大学平成19年度前期共通教育賞
平成20年度前期共通教育賞
を受賞しました。

平成18年度採択現代GPプログラム 「医療系学生の保育所実習による子育て支援乳幼児との継続交流を取り入れた体験型コミュニケーション教育② ～TEGから見た体験型授業終了1年後の学生の変化～

岡本 愛¹ 山本真由美² 長宗雅美³ 高井恵美³ 山田進一⁴ 寺嶋吉保³ 安井夏生³ 佐野勝徳⁵

¹ 徳島大学大学院人間・自然環境研究科臨床心理学専攻 ² 徳島大学総合科学部 ³ 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス(HBS)研究部医療教育開発センター
⁴ 徳島健生病院小児科 ⁵ 徳島大学全学共通教育センター長

1. 背景

現代では人間関係が希薄になり「人」が成長しにくくなっている。大学という教育現場においても、学生の社会性の欠如、人間性の未熟さを実感する場面が少なくない。それに関係する要因として学生のコミュニケーション能力不足が考えられる。

本プログラムではヒューマン・コミュニケーション授業における保育所実習を通じた継続的な乳幼児との関わりの中から、学生がホスピタリティ・マインドを実体験として学び、自らの人間関係を見直し、人間力向上の変移を分析することによって、患者と対等に向き合える医療者を育成する一助とする。



2. 目的

本プログラムでは子育て支援による地域貢献を通じて医療学生における人間性教育の改善を行い、人間力を向上させることを目的とし、平成18年度後期から地域の保育所における交流実習を実施している。

地域の保育所における乳幼児と医療系学生との1対1の交流実習を実施し、その体験によって、学生のパーソナリティに変化が生じるのか、また、生じた変化は交流実習体験半年後あるいは1年後にどのように変化しているのかを東大式エゴグラム(以下、TEG)を用いて検討することを目的とした。

TEGとは

アメリカの精神科医Berne,E.の交流分析理論に基づくパーソナリティ検査であり、人の心が持っている5つの自我状態からパーソナリティ傾向を分析する。

- ①CP(Critical Parent): 親の態度を取り入れた理想追求的で厳格な自我状態を示す
- ②NP(Nurturing Parent): 保護や称賛を人に与えようとする温かい自我状態を示す
- ③A(Adult): 現実に則して行動しようとする合理的自我状態を示す
- ④FC(Free child): 生来の衝動・感情からなる自由な自我状態を示す
- ⑤AC(Adapted child): 養育者に順応してでき上がった自我状態を示す

そのうちの養育的親(以下、NP)に注目した。NPは他者に対して保護的に関わる態度とされている。医療従事者はこの態度が重要であると考え、実習前、実習終了時、実習終了半年後あるいは1年後の3点で収集したTEGを検討した。

3. 方法

・対象者 医学部医学科1年生95名
(男性63名、女性32名)
平均年齢は19.3歳(18 - 33)

・TEGの実施時期と回数

交流実習開始前、終了直後、交流実習終了一定期間後(前期群は1年後、後期群は半年後)の3回:回収率87.4%

・交流実習形態

平成19年度前期(4/12~7/26)、後期(10/4~08/1/20)の木曜日、週1回3時間の保育所実習を10回体験している。

実習前にこの実践のパイオニアである鳥取大学医学部の高塚先生の講義、学内演習(保育所入所児への手紙の作成、プレゼント作り)を行い、実習中間期に1回、実習終了直後に1回の振り返りを行った。



4. 結果

表1. 前期・後期別・男女別のNPの経時的変化別人数(%)

NPの変移型		性別	前期	後期
上昇上昇	男性	0(0.0)	2	7(24.1)
	女性	1(7.7)	1	4(25)
上昇維持	男性	3(12)	3	2(7)
	女性	0(0)	2	3(18.8)
上昇下降	男性	1(9.36)	1	18(62.1)
	女性	4(30.8)	1	4(25)
下降上昇	男性	3(12)		1(3.4)
	女性	3(23.0)	3	1(6.2)
変化なし上昇	男性	0(0)		0(0)
	女性	0(0)		0(0)
下降後維持	男性	2(8)		0(0)
	女性	0(0)		0(0)
変化なし下降	男性	2(8)		0(0)
	女性	3(23.1)	2	0(0)
下位変化なし	男性	0(0)		0(0)
	女性	0(0)		0(0)
下降下降	男性	4(16)	2	1(3.4)
	女性	2(15)	3	4(25)
上位変化なし	男性	2(8)		0(0)
	女性	0(0)		0(0)
合計	男性	25(100)		29(100)
	女性	13(100)		16(100)

タイプ別に男女別と実習期を検討した。

- ・1番目に男性女性とも前期群、後期群では「上昇下降」タイプが多く、後期群の女性では「上昇上昇」「下降下降」も見られた。
- ・2番目・3番目に多いタイプは、男性女性、実習期で差があった。前期群で男性は「下降下降」、女性は「下降上昇」「変化なし下降」であった。後期群で男性は「上昇上昇」、女性は「上昇維持」であった。
- ・3番目では、前期群で男性が「上昇維持」「下降上昇」、女性は「下降下降」となった。後期群で男性は「上昇維持」、女性が「下降上昇」となった。

5. 考察

- ・実習直後にNPが上昇した学生は、前期群17名、後期群38名であり、50%以上で養育的態度が高くなっていった。しかし、終了後半年、1年後にNPが下降している人が、前期群で13名、後期群で22名となり、実習直後に上昇群だった中の50%以上が下降していた。
- このことは、実習や振り返りなどの体験がNPを上昇させているが、そのような指導が継続しないとそれを維持し続けるのは難しいこと示していると言える。
- ・前期群と後期群で、タイプ別人数に差があった。これは交流した乳幼児の年齢と関係がある可能性がある。前期には、パートナーとして年齢の低い乳児が多かったが、後期ではそれより年齢の高い幼児が多かった。幼児になると言語的関わり可能な場合が増え、コミュニケーションが容易であったのかもしれない。

6. 今後の課題

- ・今後、それぞれのタイプ別に実習記録を精査し、パートナーの年齢、性別、実習中の体験との関係を検討したい。
- ・さらに、交流実習体験の良い影響を維持するためにどのような指導が必要なのかも検討していきたい。